



俄羅斯紀聞

五

早稻田大學附屬 圖書館	
寄第 川田氏書院	
654	
第 20	
第 5	
出帶許不外 5	





Handwritten text in vertical columns, including a red seal impression.



俄羅斯紀聞

第五冊

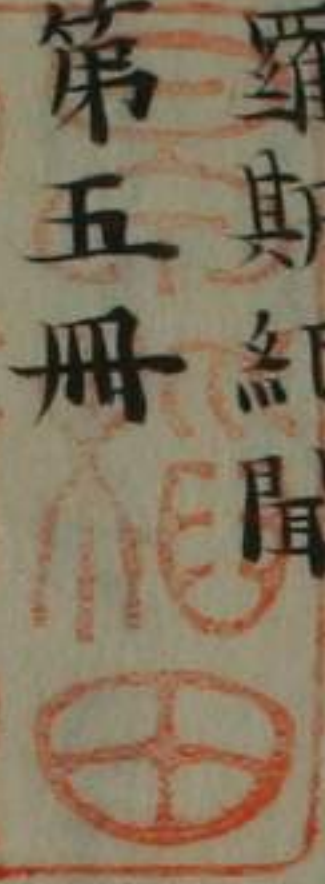
櫻庄氏家記

俄羅斯入貢記

仙臺漂流人口書

禦狄日記

魯西亞風土記





門 儿 87  
號 3038  
卷 5

特 儿 8  
2994  
5

櫻庄氏家記

勢州白子村方里至勤左馬子船神昌丸沖船頭幸夫  
上乗水主廿七人乗漕流登揚子口三國往來道法記

天明二寅十二月十三日伊勢島西浦船帆夫小少濱中安小  
舟下ケル中風悪波高沖口吹流サ波河沖  
旋病ノ次第ニ波高ク取成リ翌朝船切夫小服ノ遠外  
年七月廿日アミシイナリ中流ノ漕着致す此日死七月八日  
此島ノ能妻有リ長子ノ名アヲテト折テ此島獵虎商  
賣ニ乗居ル素人居合テ別子人トシテ後ニ預リ一命助リ此  
交ニ六ケ年ノ内住居終ニ寅十二月十三日多羽浦船帆夫去ケ年



二  
未

未七月十八日アミシイワカ帆獵席高寛集林の舟を以て此処

口地債尤家敷八松軒代官を配ナリ以て道法海上より四百里

四八月廿三日カミシイワカ着日本道ニメ三百八松里八百八十里

申七月十日カミシイワカお立付変分川船半分陸地道法三百

七松里日本道ニメ百一里百四十里

四七月廿九日千キリ着日敷十五日

四八月朔日千キリお帆此道法海上八百里

四八月廿日フホウワカ着日敷三十日

四九月十三日ソホウワカお立此道法千十三日里日本道ニメ二百七十

六里千五百里此道法を野宿日敷五十里

四十一月二日ヤカウツカ着

四十二月十五日お立此道川舟ニテ四百里陸地二千八十六里

合二千四百八十六里

四二月七日イルコウワカお立此道法五千八百二十三里百七十

百至地へ安六城下あり有日敷十二ヶ月

成二月十九日ソホウワカへテルホル一着幸太史如着物アミシイワ

カ船へテルホル道海陸川舟此道法船倉を以て千八百九十二里日

本道ニテ三千二百四十七里千七百七百里是分法候天子に款入

物由二付役人より船候後去る事其方其物國政を以て款入付



不速日奉人送馬軍台館依海に成十二月廿五日如元亦ウレ  
如是此道法五千八百二十三日日本道直二千五百九十里百  
七十百

正月三日イカワカチ着日敷十二月七回足

日五月廿日イカワカチ着此道法二千四百八拾三日日本道三  
千六百七十九里百百

日六月十五日ヤウワチ着日敷三十日

日七月二日ヤウワチ着此道法海上千九百八拾里日本道  
五百四十里千八百百

日八月三日ヲホウワチ着日敷三十二日此道郡江紀ノノ節云

山改計野宿を千十三里ト云高き陸地分九百七十三日遠

日九月十三日ヲホウワチ着此道法一月安月ノ遠有也ヨロキ云々

正月元日日本ノ十二月朔日ニ當ル何レノ月ト云々如ク一月  
如遠有リ

子十月九日日本於前由東越夷地子モ口送着元日本曆寛政  
四年九月九日ノ

アヒシイガ分如ヘテハホレ送上下道法二万四千七百五十一里日本  
道三六千七百九十九里千五百四十百

ヨホウガ分於前東工ガ地子モ口送海上五百里日本道三十一百三十  
六百千四百四十百嘉人如云云



カシイ男分東エソ地子モ口正上下地遠法二万五千二百五十一日  
本道三テ六千九百五戸とる廿二戸

閑説

ヲロシヤ女ノ唱ハ我國日本ト云々如し地名之ヲロシヤノ中州郡  
別ニ有リ諸侯有司日本ニ同シ先年ハコワカ子都ヲ遷今又ヲロ  
シヤニ由ヘテルホルルニ由ニ遷都スヲロシヤデハ方日本ト異ナリ八百  
里ハ天子之地ニシテ所ニ遷都ス民ヲ需サシガ為ニ知行録ハ  
諸侯有司ノ家亦タリ氏無シ天子ハ夫々扶持ヲ與ヘ置ク之  
故ニ天子ノ扶持人ヲ支配シテ其國ニ貢ヲ取ル亦夫ハ天子  
ノ扶持ヲ授リ秋多采ニ致ス之代也郡代物トモ准ル故天子

巡狩ノ時ハ諸國ノ扶持人ヲ兵檢致シ夫々ノ役ニヨラテ有功  
ノ者ハ昇位スルナリ又天子遊幸ノ時万民道傍ニ集リ天子  
ノ馬ヲ接育スルノ道理ナリヲロシヤノ天子ハ代々夫物共ニ昇位  
致也故天子崩御ノ時其妻位を踐ムニ其子男子ニテ三十采  
ニ及ハ維母を位ニ中ハ昇位スル莫石叶今ヲロシヤノ天子ハ女  
帝ノ子一人アリ孫六人アリ成長ト嘉ト多ク其子一人居ナリ則  
今ノ如帝ノ御名ト云カレトアレキエト唱又代也種本如ハ  
其人官位ニ昇リ子ノ代々ハ兵檢ト云ク其子幼功也ハ  
本親ノ代々後ト云附ナリ又年ハスコフカ遷都セシ時ハ男帝  
ト云ハスコフト唱今女帝ト云ハスカヤト唱ハ男帝女帝ト云別



有て國の必を遠有なり魯西要て貴フハ異形ノ鳥獸草木石  
是專宝冠故也石ハ夫々役人有テ吟味改メ諸國の名石ヲおシ  
テ天子ハ主不是ク磨色々々冠ニ作り貴フ之草木抄ハ夫々  
有行有テ天子之花畑ヲ目リ禁札ト云是ヲ云ハ此云ニテハ米  
麥ハ二貢ハ麥ハ粉又ハ諸穀ハ皮ヲ油トシ貢トス金錢用ニ以テ  
五厘ノ銅錢ハ判モノ迄有尤二十五文ハ銀錢通用ス如テ  
金銀錢共ニ九ク幣カシ大十ニテリ星ニヨリテ多クテ分別ス摸  
捺ハ表ハ方ニ時ハ天子ノ宮ヲ西陽浮シ東ハ比叢ノ札ト  
陽浮ノ通用金是之今般後有ハパタハガ文ハ今ヲヨクヤ國ハ  
花石司ル役有リト云リ

ツレヤ國ハ馬を若ク如飼育リ 走道行乎ハ日本ハ馬子一  
倍シ善急ナル時ハ一日ハ三百里奔走スト云リ尤ラレヤハ道  
法ハ日本ハ五百九十百ヲ以テ云々トす 馱馬前日ニ馬ヲ捨テ  
去リ健立大急ニテ寸尺ノ急ナシ其ノ宿ハ馱馬本ルヤ否待居信  
馬ヲ奔走シテ行能キ云々ト云捧掖リ云々云道ノ中急ヲ知ラズ  
家造リハ日本瓦礫ノ如ク然レド但立一階二階三階ト分シ上中  
下二人住居ス日本ハ云々造ト云々云リ 如ク分家造リト云  
日本ハ夫々ノ如ク云々ト四方共ニ凡石土ヲ以テ製スル故大  
ト云々ト有目諸侯抄ハ門ヲ閉テ遊以好ハ車ニ乗り馬ト  
傍リ馬ト車以引也 童ハ御人先子ト云歩以ス然シ共大名ハ云



足有日ハ足之杖之金銀満ム百尺ハ三足分御ス一ノ七叶  
ヲシヤハ日本ハ遠列其外諸島チサレ故ニ諸侯たりとい五人  
去人ハ台連レズツシヤ四ノ寸尺ハ日本ハ曲尺ハ尺三寸六  
分ハ其尺之同キ官ハ早年ハ曲尺チセ尺ハ分同キハ五尺  
百餘リ之早年ハ多ク九十九百之是尺ヲシヤチハ一尺云  
又日本ハ三寸下チ至ハ二千百十百之ヲシヤチハ其法  
チ三寸ハ三九十九百云々

魯西亞女帝名 パテリナ 今般乘其船ノ名 ヒリヤニシ

此卷ハ概名オ左邊ノ様ニ以信用字々

文化戊辰六月

烏原子後

俄羅斯入貢記

文化元年九月七日魯西亞國船七隻ハ有ヨリ解書付  
今日着地ハ碇ヲ入ルヲシヤ船國王ハ使臣ヲ役人トサソト  
船名クニウセスラ申カハ越左ノ船  
一ヲシヤ船一艘曆數一千八百三年八月其和三年亥六月廿四日 回所カ船第  
那瑪ル加ノ内エフシトカアリヤ碇英南亞弗利加海ノ南ウ  
シヨヨリ南海廻リ曆數一千八百四年九月三日壬子ノ八月七日  
回所カ船今日述三十七ノヘテ海上ニ碇案ノ島岸仕立左艘  
ノ蘇少着地ハ後リハ船名云々

江府進呈ノ書翰 一通ハ和文能名交リ和解書 一通ハヲシヤチハ其ノ 一通は物文字云々











國名

フロントウ

右にフロレヤ西王の捧書納るる意ある事細信の使節より  
後人レサノツトトク取リテ其の詳仕るる事申すべし

九月十日

通譯目付印  
大ヤ通譯印

一書今國王アレキサンタレと云ふ者も亦今領する國をたし通リ  
モスコビヤの政リラレヤ西一王と云ふ者も亦今領する國をたし通リ

モスコビヤ

キーフ

ウラティーン

ゴコロワト

カサシ

アスタラセ

シリベーン

ウウリセン

ケルグ

フレシヨウ

スモレンスカ

ウリカニイ

ホトリ

エノストラント

リウラント

クハルラント

セシカリ

サモキテイ

コレリ

ニウエール

ウイシエ

ホルアリ

エゴリ

ヘルシ

ノラ

ニハセン

テエル

リヤヤ

ホロワカ

エトウ

ヤロス

ベローセル

ウシドル

キアトル

コンテイ

ユウエリ

ノステイ

カハル

シルカ

シヨル

ウイテ

カルタ

カリ

ケル

スレ

テイ

エトル

テイ

フル

エウ

ホル

セル

以上朱書皆自大槻隆水魯西  
西來貢本末雜記鈔出



右に外中國の地名を記すに及んば其の相記するに右にラロシヤ使  
一 船の役レサノフトト口流りハ解レ名中ハハ

九月十日

通詳目付印  
上々通詳印

東西要國の日本迄の道法

- ラロシヤ右三府ヨリ 五百里 ケノ子ニルカニ
- カチアリヤ塔分 三千里 ケノ子ニルカニ
- アラシヤハ 三千里 ケノ子ニルカニ
- カハシカワチカ 千里 ケノ子ニルカニ
- ラロシヤ船歌阿蘭陀回換
- 一石火矢十去挺身冠多有之積多物融らと京中尤積多
- としく鉄呂積積多有之

一ラロシヤ人衣服おも阿蘭陀へ服は似寄り酋長は金銀帯下  
 縫いタシ至テ玄波ニ有之ハ帽子ハウラシカニ形異ナリ  
 一入津に御伊王塔の内に破紙の板使多しウラシカニタカニ兼石  
 橋助左衛門多村去御本庄高乗船故ス

但し板使船の所取積の方記ナリト之程おも七人鈕仕込  
 鉄炮を持鴨ニ早合ラ下ケ其者其前ニ板身と鈕ヲ持ハ者一人  
 大丸右杖ヲ持ハ者一人右何モ列ラ下シ相違辰の板使乗船  
 之ら直ニ太鼓ヲ打おシテお國トシテ板身と鈕ヲ持ハ者何  
 一 号配ライタシ鈕ヲ板上の処鉄炮ヲ持ハ者七人向ハ一人先ニ進  
 鉄炮ヲ放ラ仕飛ラ放シハ板去人ハ者ハフキ田橋鉄炮打ハ







仙臺漂流人口書

從文化二乙丑年三月到同年八月呈國漂流仕人陸奥山

之五回人口書

松平政千代領分奥州宮城郡寒風江濱長土部村

一、津太夫 六十一才

二、同國生郡深谷室原三才村

三、同國生郡深谷室原三才村

四、同國生郡深谷室原三才村

五、同國生郡深谷室原三才村

六、同國生郡深谷室原三才村

七、同國生郡深谷室原三才村

八、同國生郡深谷室原三才村

九、同國生郡深谷室原三才村

十、同國生郡深谷室原三才村

十一、同國生郡深谷室原三才村

十二、同國生郡深谷室原三才村







方總部房引也詮水を標お凌水の之に方角七候不扣分  
此付流次申すのこゝに在りて同日破成打破通す口  
ハ其の事お破回の上極に裂け付信成以引く福らり  
かけ帆成解差肌を打込取楫より輓控座片楫も波に  
不し此付乗組も若石砂表す才、居申す交二月五日表  
之方七打破取楫の方垣也了止波より取ら官粒米計百  
俵程残す至其の外に別於漂山内同日卯表之方少  
綱部房破成五尺板成波より取ら下次才之風和同  
三日海上に楯丸本を流るる付地方近寄り此が城に  
敷と札を善神園と上の交地方九百里と申神籠下り天象

七下り官同三日表之帆成車立り信付柱に波帆  
中にかす信成引也風を任り去り或ハ漂い廻り官  
中七日程より一ヶ所氷を雨降り常と氷成取海に五倍成  
凌り内中五日辰正の風を去り地方に乗船中夜を  
神籠と上の交地方計百里と申神籠下り其日神籠と  
上り処遊々地方近くお成内同八日より十里と申神籠と  
翌九日四時以東州の方を雪積り山成尋出同十日  
より一里程地方見一官乗組も若石一日お慌れ此程  
其の程乗組も船成楫成却り糧米之俵を分り廻り此  
後物も亦取ら官に乘船免成持捨六人此船成



上り山日本地へ人を見出地へ人言はる付野志  
之者へ或は存るはたお守令も不居者も付防方も  
鳴り日数十日狂死者有る家者も候天神園と上り  
五十里程人言有る神籠りも付為し橋船のり柴  
上流奥の方へ来り空六月四日煙お見へ付人  
とお家へ前日南より多し船来り人お見へ付  
追寄りも多し毛付の皮板も物と着候しお見人  
お見へ付令是國は深流故候と存り空何れ候  
か声も招き等候も先一向直り中怪候存船寄  
中りも処遊へお板へ人十人半程お招き候付此

是能船候お見へお陸へ引上り候仕方改へ候  
其お寄り上り無中山古き世に候有る船并面も  
悪く船乗人へ船にお見へ水并船解し候も魚  
古しお乗るも何れお見へ才より黄りて食へ中  
お見へ付候も付候も由跡より所り中山  
候も候候候候候候候候候候候候候候候候  
月へお果中り何れお見へ候候候候候候候候  
候候候候候候候候候候候候候候候候候候  
候候候候候候候候候候候候候候候候候候  
中上り候候候候候候候候候候候候候候候



對大連集山松子て何ノ尸ノ少ク一白通也ヤ替也  
て魯西人ノ由頭占草ノ着物所冠ノ筒袖ノ子  
哉通 草ノて強心船ノ乗出哉必半成止也持  
多ノ松ノ以ニ布柱ノ船ノて集代ノ任  
形致 船得少松子ノ付一本柱にて首ノ執取  
着心交者点ノ事 此ノ其日布人ノ尸候相分  
以松子ノお見ノ事魯西人私ノ乗集橋船  
哉島人共ノ御々々付船ノ乗出候仕才ノ  
右ノ事一回来組魯西人共住居ノ交は連  
集山松子供方ノ事 大橋船ノ帆杖かけ走

沈

出レ同航回時以魯西國ノ有張不有ノ事  
着致 此所ノ三四日候位ノリロヤ船ノ乗居  
三十人乗集阻陸ハ三十人乗出在三年一月ノ交  
代致由右船ノ船頭ノ事ノ少ノお分り私同  
所ニ一ヶ年迄留致 事ノ有ノ船ノ日ノ替形ノ本  
未定拾入ノ事ハ其冬ノ月ハ今程ノ事ノ法ノ事  
足レ疲目ノ事ノ佛ノ事ノ付家内ノ事ノ而レ致  
有子ノ穀物ノ事ノ付鯉鱈ノ事ノ魚類ノ給也交私  
這箇中魚類ノ給也ノ宜交有ノ書致ノ付此中其二  
ヶ年 同ノ交代ノ事ノ知レ連致ノ旨船ノ乗出候











煩は付代官の醫師の老の受申す中同族の某お  
其の心造て黄葉の勿論丸葉散葉おし各中座線お  
造りて等々未二月廿八日相果の付葬夜分お願の交  
彼を宗旨より若く寺におりてし以て不お成り  
私の方より葬の夜中代官より七午指し掛り付  
其後お停泊し入行より蓋代お付魯西匠人墓に  
編り持来埋置其後五夜分送具城借初細工より日  
本奥州中竹漢阿部冠吉中治七十三文と彫付墓に  
上り建中は他未三月初旬此お立設せ魯西匠  
之部は連系由代官の中後有る同人員葬妙に

肩お腹引坐お初共十三人お是日七午役人お添前書  
同族の車子来お立設道法お存取場より馬に續替  
昼夜お城の倉庫より車の上より給させ使用しお下り  
お及今お座し我お交回おお立し是日おおた其法  
病氣付お係し其おお頼造り快系お次より送し  
宿にお居候し残十一人お立日お送中設し月日お覺カラスヤ  
リの中おお看設し此死ししフコシヤか之代官系居家  
子軒種も看し授子見法同おお立しスケる所系お不  
其日おしフコシヤか之代官并ダツタンヤ人魯西匠人交入  
住居改しし由回お出立上カテおんカと尸新お省お所











お成此とニコウイハケルイナクとお成彼西と女と妻  
・又持子存有る由お成日布と孫子ヲモお成此付お成  
又換授致し其後此等と右と老老へお成兄此三百  
程と家と妻子供五人お成此言仕と老老と各此座由お  
成節と方と這箇中國王ヨリ申付此と由と老老此等  
最号并賜半養の合用と此等お成此付黄旗と  
上代官所と氣同交這箇致し此等國王ヨリ此等  
由と食物とバシ承魚額此等一日と此等宛お  
成此色凡一ヶ年程と此等交車と乗役人附此  
不と見此と此等老老此等此等此等此等此等

尺物と此等此等一向お成此等此等此等此等此等  
日本渡海と此等此等此等此等此等此等此等此等  
此上等王ヨリ此等此等此等此等此等此等此等此等  
付此等此等此等此等此等此等此等此等此等此等  
見送と此等此等此等此等此等此等此等此等此等  
換授不仕お成此等此等此等此等此等此等此等此等  
中不と此等右此等此等此等此等此等此等此等此等  
時付一実此等此等此等此等此等此等此等此等此等  
勢乗此等此等此等此等此等此等此等此等此等此等  
リヤと中漢と此等此等此等此等此等此等此等此等



日能其在船の物も百ナリヤ、中へ流る水と交直  
しお船改回す自來頃アメリカ内へ由りカテシナ  
交は着船改回す人物衣類は着何れも大だか  
日能其船の此所にて帆柱を買上替承せし  
鶴お倉物ヲ積込調へて正月初旬回す帆柱  
月夜二ヶ一サナリ所へ着船改回す所の人  
夫七上平有る何れも裸に成男はあ身に善  
と入女も裸に成男も木の葉を覆ひ居中の  
け古八人と喰ひ出時死人と喰ひ出既私に  
船とさるる死骨有り持来し何れも死骨有り

は仕形を改男女多海への船端に有魯西兵人其状甚  
不致の交食附添仇の名致は其船中何れも衆を食  
存也玉ナリ鉄炮放りて漸く退き中此所にて魯  
西兵人其水氷の上陸致しル處家居の多し何れも穴  
掘住居致し二日逗留後右に交お船海上二十里程  
有る由四月下旬頃ト先サシへムケル所は船繋し改  
承を調ひ積り所其所と其水一匹と羅紗と取替吳  
の板仕形改回す付魯西兵人知不致お船改回す  
自初旬より中へ所着船改回す尚不結合す代官  
ノ下候者人衆組同八月五日回す帆日本の地を







去冬より今迄若右俸の極子有之由に有神にて  
中止旨の由吟味申上り申候所共候御玉に於て  
切支の申上り門勸進申上り候所共候御玉に於て  
子に見聞候御玉に申上り候所共候御玉に於て  
此御玉に申上り候所共候御玉に於て  
申上り候所共候御玉に於て

魯西五國の極子左の通

一魯西五國に在りし力此所の南の國に在りし力  
に居て城を築きしを以て磨石の城に高き  
丈位に築きしを以て磨石の城に高き

政の内を築し天井七丈白く塗立柄表石を高く丈  
程横に百位し有之左右共石にて築きしを以て  
築きし金物と申付此等子鉄炮を以て築きしを以て  
築きし有夫より奥に刀所凡四五百四方あり八九百四  
方位に所幾百七有之百毎に明り九の硝子障子にて仕  
切之の言廿八九尺幅三四尺の硝子に大鏡ヲ立せしめり  
ハ金銀玉とありしを以て一箇に昔人此三人あり四五人位に  
居候ハ仙百と云ふに起りしを四尺四方斗に額人候女  
ヲ画の柄に敷敷かす玉是金子金銀と玉ヲ深山下遺り  
飾り立りしを以て居りしを以て築きしを以て築きし







之所有之谷之町名之唱尤町中 之右与之旦那斗之  
外与之旦那之力更之戸都合四格四与有之由町之記  
只悉く木戸有之町扱子家並之候之商家ハ其亦  
雖之並之其律之町之吳服之斗之吳服之町内  
之其之羅紗之類之商之町或ハ布木綿之類之其類  
革類悉くお替之其物町之官相町之木之町魚町之  
歎町之其諸職人之町是之其前書之通夫之其お替之  
其類限之其地商之職之其之雜居之政之其法後  
人其者町之其入交之其住居之政之其居之其之其扱下  
中之其之其是之其石之其にみ之其家之其大其亦其扱下

此書ハ是輕所判子不之其而一用之其老危城連之其用之  
仕切之其兵隊之其人数之其之由此之其之其其扱下  
平日銃炮之其其其之其右之其外之其藝武藝之其其扱下  
遊之其町之其此書ハ由是之其八及見之其之其之其  
其係之其之其三里四里之其可有之其之其見之其之其  
其係之其之其使之其之其宅之其其係之其之其係之其  
其係之其之其其係之其之其前書之其其係之其之其係之其  
三四百之其係之其係之其係之其係之其係之其係之其  
出生之其係之其係之其係之其係之其係之其係之其  
人係之其係之其係之其係之其係之其係之其係之其







骨ヲ組立垂見セキハ右之内別カ降爰物ヲ羽之ヲ而小兒  
者之是又死骸ヲ活キルルル飾リ立辰見セ申ル世界中亦有  
何カ由る虫獸有之由未カ知ルカ之是ナリ

一又大なる袋并キ船ヲ指袋船ヲ細引キ繫キ袋ノ風を去  
セ右船ノ男々各人乗組空ニ上リル時戲子海ノ明ニ見來由  
子ヲ暇乞飲ルテ静キ上リ空へ遙カ上ル時ハ袋ハ又一ハ後モ  
人者一向見エテ船トリル落來ルヲ見物以テ此時モ  
五王ノ好ミテ何カ上リ何カへ落ルルモ指圖以テ由  
之爰落ル爰違ハ其後又一ハ直ニセキ中ニ其時モ遠  
クあり見ルルルハ後ハ又セキ尤上リルニ去風流過ル

てハ其成テ中へ能ク風見定ルル上リル由ナリ



一又エリユツカキハ在ル内輕業ノ板成物又物以テは秋ハ其階  
子へ板ヲ爰夫ヨリ雪ニ積リル高岡ハ亦ニ立掛垂上リ水をも  
流レ侍志勿子氷リヤハ亦下リ上リヤ船人ヲ即三人或モ四五人  
ものせ右階子ト上リ突下リルル志志をづみまて下へ落ルル  
平地ヲ即ニ拾る走りヤハ或時モ又高ク材木ヲ積ル其上  
ニ車ヲ仕多ク車ハ積リしし附板の烟ハ人ヲ二人のせりて  
車ヲ廻一ルヲ又物以テ

一ビゼリホルカより二十五里程隔リカナシタヤ能く湊有之此所を  
歐羅巴州之内ニ其勿論テ墨利加外他國ノ船がびり



入賑ひを其の交易専ら以ての物なり

一人物を魯西に布玉と人物を色白く髪も赤く又言ク  
衣服を友人を其身元更とのを羅紗と類の襦袢の類は  
仕立筒袖の以て役にあつては革の帯をとり都て能人  
結敷を着改めを曠は仕立友人の帯をとり随ひ飾を  
色に替りぬる毎に衣後年し魯西に人の物より言ふ  
女之衣後を筒袖を腰より上を細く仕立襦袢ありしを  
廣かりの袴をとり裾をモクシマシ方より以て髪の色は  
白く粉をすりかけ結ひする色は帽子を冠りし平日  
を小帽子にかけたり長中なり

一 韃靼人其の色黒く髪を剃り結敷を障物をとり小帽子に  
かむり着物を魯西に人同様に相見ゆ中人の髪は黒く羅紗に  
類を着し軽き者を革の帯をとり尤何れも皮役に革帯  
をとりしなり

一 シベリヤ人其の色黒く髪も黒く形も太く一件は赤  
ニテ衣服は革帯麻帯を着し冬は帽子を冠り夏は冠り  
役に革帯をとりしは女は頭より巾着物を着し役に帯をとり  
しへりしは内をとりしはツケマコウマヤ不殊の外賑く魯西に  
其の成るをコウテの物集り賤めなり

一 食物を魯西に布玉と人物を色白く髪も赤く又言ク











一山獵之後五分洪炮を射用ひゆゆもいへりいこの内を八半弓  
を射用ひゆ者も射る者も執中りエリホノアソカリツケトヤ不  
の人名ヲトシテト唱ヒ至る半弓運去り此等右左唐玉近キ処ニ  
由取ぬりゆ

一祝多の年を日本の十二月中頭を正月ト定毎月初日夕八日  
めしつ祝ひ且極め老若男女も業ヲ休ミ肴物肴久遊行  
寺参りお波しゆゆ且越年とヤと云々此は誕生りよ五り年  
一ツト定マヤ

一神仏の後神トヤ去り及見聞寺院ハ亦と子有る布着と給  
子し極成物子人之形の極成物有るゆゆ何れれ分ヤ一夫  
堂し極成物にかけ並位心政ゆ墓にも有る死者を葬ゆ時  
ハ長キ棺ヲ拵死人ヲ仰向ヲ祓かりて入也蓋を打付て供親族  
とそを去りつ此寺に持来り導り法墓ハハ持来り立葬にしをし  
死別ハ日本同極も甚然傷仕ハ石塔去大なる野面石ヲ並夫ハ  
積又字ヲ切付り佗國者ヲハ生墓ハ去葬しせや尸別は佗  
而し去る葬ゆ墓ハ此等且寺し佗寺去惣祭テ後も別ふ  
尸袖幅度肴物ヲ肴しそ外弟子も極成とのも有る葬礼の時  
去右佗寺も多子も出何れ往文と極成物ヲ後も葬中ハ尤  
他國とのハ葬ゆ尸既ハ隠流人の因去而治病死しをしゆ節  
ハ外隠流人ハ去り葬ゆ近きて寺もハ一向拵ゆりゆ



一病者第少危病といふ有之貧窮者又去他處し者も右病人  
少危へ入至療治す加へ賄ひ返悉官取分年百あり之醫師も  
産中好も外料療治するおもふ外菜或は一味薬り用ひ布  
道と申す之也

一犯人乞食所を多ク少生か得も穢多し故由去是少生也  
右者隠居人一件市吹味書申上書ホ多あり之由り  
事終り禮は累々

御秋日記

先年唐太しクニココタニふ交し番人ホ未秋賊ヲ捕レ  
彼ホおむりカモサカ欽子返由す後彼賊又番人ホを連  
れ来しと云り其内少形有産し者福相と云ふといふ彼  
風俗物怪談聞はあふ記す

カモサカし道子作り耕とのは考し歎蕎麦大長豆小豆  
蕪大根柿のへり大抵布乾し物子吳何るとあり玉佐常  
お食するとのは表蕎麦を常とす

魯斎無玉都より十日路と何百アノリカし内ニ六ニヤと  
云ふ所子と米と出奉ふし其外何れも生産するよし是は



唐太子て野他人捕獲しし事トコトハ多ふものをおおひ送來りし時此者福松の語承りて予に其人を見たり元年ハ何處里かしと云ふ赤杖の御に事りしを賊お雇ひ連れ來れとの  
あらん

魯齊無し西都ニは米と秋米を多ふ福松通海して舟を撞て食よそ米を糶たるを五斛程も一同お贈りたるよし凡粒し  
長サ五尺お歩と何里なん太々とのなり炊たれと日節のう  
るし米よりハ倍かじたりしさくきとのなりと云

福松事りし節ハつぎ里下舟を漕りしと云福松運爲し  
たる湊に較ぶる所よし大抵トロバグレコイノ湊ハ船し

數番繫キ時ハ三四十艘とあるよし

寅卯之末多子エドロツフ唐太造より亂暴したる賊船は  
彼處し船より中より以下のよし船れを最上し大船を餘  
能巨大なるとのあらん歟

合葉の芥子も色殊多し能樹ふたると黒胡椒も如し  
先を巨炮の銃也よし打し予福松の製法を知るよし  
也といふよし不見と云ふ又船中杯ありハ船底の合葉は  
多し水漏を蓋キ決砲の陰に徳れ見し能るを折て各人  
危毒を忘たり決る人より入ると云

巨炮の葉は此の初め即ち合葉と教へたるを入ると云



は煮附木綿し如きもの子合葉を二三合位も包みてき夕と  
訖夕も筒子無して込ありそ上子あをを詰りあり小銃ははに  
葉をこらと折し巨炮は尤口葉ヲカリし  
小銃は合葉紙紙し袋あ詰り玉を入る口紙折りと器打時  
と口まで袋口口を喰ひ折して筒あ込し  
塩ハ色馬とて薄色の如し徳玉もを粘るる我々展太乱暴  
の時日ちと塩を粘りあり彼玉を粘り煮散せしよし凡  
詰りし塩日印子まらるる詰りし詰りし  
白砂糖ハ其あきる雪のこしとて甘し予按る  
みね毛の緒し如くあらへし

鉄炮小筒し内子つし左子筒印ツ三ツは掛とあるよしよし引金  
と筒の敷能何ぞと過こお放つよしとサ印尺内外とあるよし  
カモサスリ造りは伐屋柳と志津ノ根ゆよし余能し重きとのし根子  
みんぬ此中と玉都と志直あより一子よ一皮新貢もらと何り  
三子よ一皮と新貢ずらと何り皆代りし子玉玉朝もらよし  
此等と者常と細細もらよしは供五三人も連れたるは余能重  
き貴人あり持筒をは近習新しとのみ粘り是輕ゆきとの  
を老人死ハ連れあまらよし常と送行しはを僕位もらと  
と何り  
鉄炮は口廣き筒何り或は口廣くして鉄櫃ありよしたるも



有り何れも筒の中砲は得るごとくして其様なるもの有り玉葉を  
込に八通開十糸玉位にまるとのを三挺も木綿の如き  
とのよ包を込み其上は筒目丸を込むとすなり

代着神と衆供連五つ人の内は衣裳改中襪履の中笠物を  
被との有り多水其外洗心既あり掌るもの有り職部方を  
掌るもの有り先を一つ或る是りぬるとをせり

大抵舟之矢倉に砲を有り皆丸く木を中より穴を撃たり  
此穴に巨砲を仕掛ておつよし別子鑄圖有り筒は日本よてし  
百目玉位とす也

彼如し肉を八代着をも有りおよむ必ず要害と土を築き

何れも日布と種は柵を揃へたをうり後ならしき所をば見  
すゆめしべートロバグレユイ妙は侯し入口左右見へ向りて又  
切をよ言サ五六位に芝土を築き其何れも巨砲致仕  
掛て何れも其五子に肉を根付として作りたる家も巨砲  
の多錢入し置りし此土を築き方譬へば長サをうり何れ  
も土は其何れも巨砲三挺と有り長サ十石位入り柵むりき  
と何れも木杭を打ちたれよ志わらむを切き石を築き  
土を入し長柄ありよ土を築き又餘り部十石もかくのどく  
して築きたつ所も巨砲の仕掛する處に土を築き土の石  
されり一幅を官能有り何れも中の通りも築きよし







ハ水を流して味ひし物あり酒してと白くありき妙  
あり冬に氷りては氷極厚之其後接はき即夫と何ふ厚  
き氷を流ぬの極ありて入ぬと時は自然に消解するよし  
山ハトロバトブレエリ遠平山を樹木ありけり此も多し  
カバノ木も少くありて取めこれ極ありて色  
彼をみて花ありて王都へ献じそのは皮革製のみよし  
皮を之より取らばアラカト云ふ

當時海軍西無王し名をアリキサンダラシト云ふ也

カモサスカリ遠より王都近し里数大抵十月毎路とありし  
冬にゆきはソリと極ありとのみ乗り友を幸せり此山川氷雪

と上級自由ニ行くゆへ行能殊と速なりては川この氷と溜新  
とて川ありてありて行能とるがごとくあり

とて何ふあり

カモサスカリ代官は之を重きとのまて日布し法候と云ふ也  
との也政令は大抵此代官より出るとし今も代官の名候と  
ザリノマ云ふ也

福和捕と云ル事ありたる船は中よりソリと船ありと帆  
三布立り申と船ハ五布立りあり

大船は鉄炮挟む階ありてありし帆船の後手あり  
所子は操千何々の應ありて重きと云ふ事近は中位と角也



抵社死仕掛るある也

彼亦人洋中あり海岸に人聚まても焼くんと思ふ時を  
炮流むし如きとの儀也

巨炮を以て砲銃銃と種あり志所を打んと思ふ時を銃  
五之迫手亦ハ銃を以て決むる通りよろしくして南に砲しと云  
詔を重んじて迫き利ありと云ふよし福松ベトロバア  
り子行節悔帆の志ありしあや少なき同めて二三百と何ぞん

し思ふ所一三四位位子見へし少老の如きとの儀也  
角五寸角位の砲を以て取布お買きたりし是も決むると云  
あ糸五何ふアメリカ人唐太を捕へて船を以て送り來りマコ

と云ふとの儀也彼ノ船中まてはマキロと云ふ也  
福松彼船中何れし時彼亦人ともありしは日布子勸

少も恨を合ゆるは等しと云ふも是も何角と謝禮を述  
べしと云ふ久しく交易致れんが為を云ふし交結する所

近使節を以て交易し交易しと云ふは許しと云ふは  
王都を以てりゆても中統を以て子付と云ふは奉勸を以

よしと云ふは定めて彼亦人ありの付と云ふはあて  
カモサカに伐良る也このお讀もて決むるまては是も  
と云ふ  
彼亦人佛を信念するも深し福松佛も亦男女佛



を念ぶるをえんよ夕方より身を洗ハ香を焼き立て  
おーきおー凡三十お斗りといこー一おおたる肉子先胆  
伐の名を稱し先この人こ名を稱しておたるよしお  
念入事と

よそ煮炊の仕振々大抵極東地と同一溜と尻を火中  
しと炊少く煮物惣して上ッ煮斗りして溜底煮一りと  
何一菜と款と皆炊煮しよて煮りよし

着服は肌着と上子胴着を着し律として腰袋一の生上子  
ちんちんの如きものを着す先上着と脚と志股引と如き  
とのをとりて紅毛人といし着後と羅紗羅七つと程と

維新の時より旗中或る申極東と云々と着用物不替  
りといふ極は極東と好し

ペトロパウロといふは人家三ナ軒ありて内よ口や  
商人店といふ此の一軒ありてそのは為れ細物太とのと  
高やし福松ありて此極東といふといふキリス紅は高船  
中見るとると他国より交易とてなりと題なり  
煙草と他地といふおと出まかりしとていふおと  
なりは皆アメリカかか交易すなり

茶と唐菜とつりて日由道は茶と重宝とつりて  
おとつりて大抵高船鴨店とつりて八丈程あり柱と志げりて







より一阿えり然し不空等の諸道にわたりて見返はあま  
となくリガニ行リイニリして不里儀小思り

彼祇申しは形むく女くまの像を業り阿るより下ハ細弦  
ことと硝子くしすうし見な粒小粒もるす紅光と弦と女

當時やまゝ容貌を正西写し不志するものはお徳木之  
可好し吾西在法不たよえ一掌の飾も細密に三つ一紅

毛の弦と回

酒を造る様としてベートロバーゴニイの商人家ありたること  
家小わく赤色さしてをさくつたり予を飾りし

又唐梳をみるふ是もわかし梳のてく花つ飾あり

赤みあり

飾もあり日本に飾よとあるなりあり堅くありし物あり

さあり飾をバーテキと云ふ甘み

紙跡あり七寸位幅三寸位太あり是し物を買

つとるふ三貴文を貴文と云ふ粒不尼白中不印あり三ツ

阿里朱し押たる

カモサカナリ東根第地キイタフ遠く沖ふあるニユタと云ふ

飾りし物ふとふ粒を乗と云ふ徳木人三粒は廿一羽あり

せきと云ふ

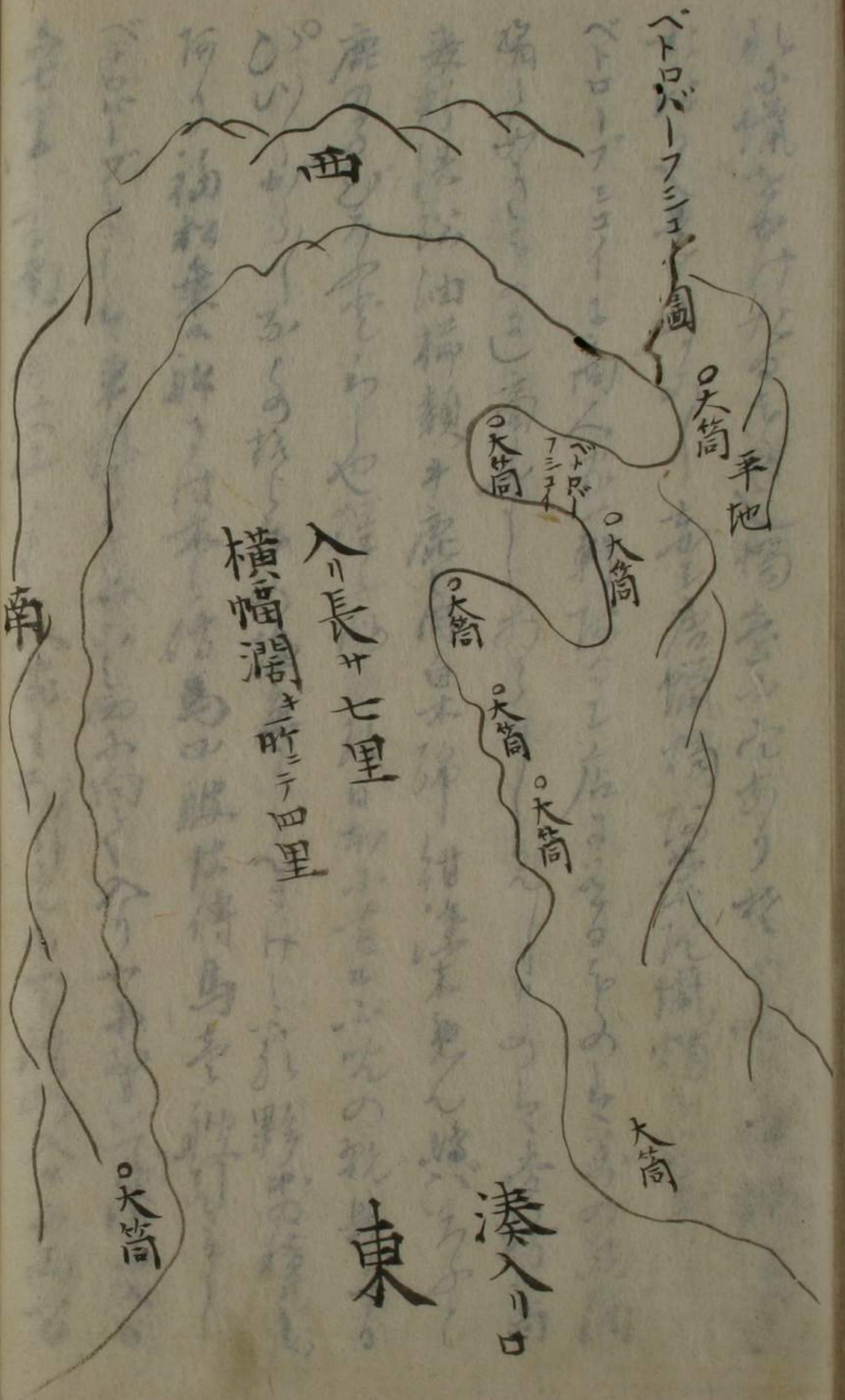
徳木ねり明は蠟燭と云ふすくあらし生を扱は







ヘト只一フミエノ圖



平地

大筒

湊入り口

西

東

南

入り長サ七里

横幅濶キ所ニテ四里

西をみて大筒は掛くはるる一バーブニイコイのをなすこ  
 野よりと海峯山とくくふにふす所は掛場のありをて  
 かし十挺は往先あへんやと尋ふ也  
 福松治と序し種復りしべ只一グニイコイは湊を測らるを  
 是れ其通以候記してふ紀しをりか福松云候  
 候心りてさしと友なるに形馬とふふ出まぬと云り  
 彼れは少少ハ埃先皆白ト日かこしと云ふ白子の  
 十軍余ふたりとありと粒をも出まぬと云ふ後先あり  
 外にさしと云ふ皆なりと云ふ一初人の軍伍とてまは  
 たりありは以中と尋ふて候也



秤ハ 日中の大秤と秤がもをりて小秤と四小端を秤  
年を成すは法をゆか量に重さふくしをるをせり  
初午より一十六四小秤にたふ端をあらうらうらうと  
やうやうを合せり

予彼少人の園に音あを興地と云ふは  
やうに地名もくくく小端細松のこいこいには小部と同  
く小細松をこいて氣の付くくくもくくもくくもくくも  
きうくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
碓石ハ 日中の角を付金程替りたりと碓石と云ふ

どカニバーニト云ふあり

男女を小盤と云ふは油盤付く丸球汁を足す也と髪  
頭ゆかして髪をくくくくくくくくくくくくくくくくく  
してまけぬ様々 日中と大端同くくくくくくくくくく  
ユサと云ふ  
ゆかゆかゆかをせらるる 日中と女と同くくくくくくく  
をかりなると手面をゆか洗ふは阿の粉ゆかりゆか  
ゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆかゆか  
予福松と云ふは日中と云ふを阿と云ふ或と阿ゆかり  
福松と云ふは阿と云ふゆかりゆかりゆかりゆかりゆかり



志うしなうし彼玉者もいしはヤウホとていして海に也  
かりきして候はばよと云ふ様ありしをいし何時しと  
心易くして事ん一と云ふ候も是なるあり  
去辛事りし如し水主候者子給金解りてみ入之と云  
と云ふ何と云給産ありし由一年何費しと云ふ候は  
サラス

ニコラキナガラミと云ふは大船取と云ふ此者熱身法炮或  
刀疾く候なるを陸中や尤多力として氣性為常しニコラ  
人候と云ふし秘秘彼者熱身と此候と云ふ候を何して  
斯は者んと云は某海國の合戦と云はいつしと云ふ越

大敵と申しは必あり割り込みく候し是反は候と云  
うりたりと云ふアメリカイギリス杯随と云ふ時と云ふ  
去向の事

男女と交りは大船取者あやし皆りあり候中一寐多時  
は唐お郎單と云ふ候りきるものも何づりて候は  
うせす大船と云ふ候は三四人候り候候してさす八寸  
は備團毛纏候と云ふ候はさしと云ふ文句は乳候と  
そくを抱て候は候は候して候は候は候は候は候は  
為常候候は候は候は候は候は候は候は候は候は候は  
候は候は候は候は候は候は候は候は候は候は候は候は







コトクニシテヤリオキニ計リ申シク地帯ノオト見  
クハ子ノ木ニコトクニ申シクハ云ハシメテノ人付  
後書ニシテコトクニ申シクハ云ハシメテノ人付  
抑シテコトクニ申シクハ云ハシメテノ人付

ベトバーブニシテ申シクハ云ハシメテノ人付  
抑シテコトクニ申シクハ云ハシメテノ人付  
山者然リ初モ然リ何レ其意アリコトクニ申シクハ云ハシメテノ人付  
角ノコトクニ申シクハ云ハシメテノ人付  
肩ノコトクニ申シクハ云ハシメテノ人付  
筋ノコトクニ申シクハ云ハシメテノ人付

コトクニ申シクハ云ハシメテノ人付  
山者然リ初モ然リ何レ其意アリコトクニ申シクハ云ハシメテノ人付  
角ノコトクニ申シクハ云ハシメテノ人付  
肩ノコトクニ申シクハ云ハシメテノ人付  
筋ノコトクニ申シクハ云ハシメテノ人付

コトクニ申シクハ云ハシメテノ人付  
山者然リ初モ然リ何レ其意アリコトクニ申シクハ云ハシメテノ人付  
角ノコトクニ申シクハ云ハシメテノ人付  
肩ノコトクニ申シクハ云ハシメテノ人付  
筋ノコトクニ申シクハ云ハシメテノ人付

コトクニ申シクハ云ハシメテノ人付  
山者然リ初モ然リ何レ其意アリコトクニ申シクハ云ハシメテノ人付  
角ノコトクニ申シクハ云ハシメテノ人付  
肩ノコトクニ申シクハ云ハシメテノ人付  
筋ノコトクニ申シクハ云ハシメテノ人付







カミヤツカトミヤウ

ヤコ松常死にたふ物等と医師と見ゆ〜  
多勢がたふたふと云ふは、こゝに者胆馬と云ふ〜  
多し病氣もしお果たあり左様おより家子死期近し  
〜

魯西亞風土記

一 幸右美松おより事々番元舟と云ふ医師お徳と趣

一 七月十六日松お出立八月十七日江戸省道中三千百圓入  
幸右美い多はる里多路と云ふ〜  
日数多かり〜

一 ヲロシヤの都城テルフルカと云ふむり〜ムスコツタ云ふを都

と云ふ〜今をミエヤと云ふヲロシヤの志と云ふ地と内子都を  
云ふと云ふ〜

一 幸右美は是事ヲロシヤの従人の首長アタムキレルウエ、チ  
ヲウケスニと云ふアタムキレルウエ、チの名ヲウケスニ















のしんをふるふなりとを

一任得ん中一凡さぬ海大万段とつる物と後小念  
多の出来経た何なる事し中より何しとてさる  
そと女也くさるる存をくく給念く清皮人等とてし  
くくく女智と撰く一或田北をさくとは若段とめ  
為く段とくく何れ及ら何百段何段とてなり  
定るとなるあつるれ

一ツヨリ事人々等とてくくく一海とてさるは  
くくく厳重とゆくち中とてさる一極北執事とてさる  
アカいと尤難悟とてさるくくく大段とてさる人

アカいと尤難悟とてさるくくく大段とてさる人  
アカいと尤難悟とてさるくくく大段とてさる人

一細は細くつらくくく一七右何と事同と向一極小  
引けらぬ事とてさるくくく

一彼土のあら大なる重位と作りくち物とては亦此  
蓋然重言なとの如くさるる後子の積子とてく  
穢布の皮とてさるくくく一故りく大と  
くくく一階二階三階よりとれ終く極極とてく  
方とて積たるはゆくとゆとの積とてく積子の  
蓋とてさるはくくく一あつらとて極とてれ時中







その刑の刑ありしとて人の婦として他人と奸通  
その刑は其罪死するべしとあるものなり。其刑をたゞ  
の婦ハ再の嫁せんと欲するを許さずとも家をたゞ  
者らに奪するを死せしむるの儀は人の妻ありし  
元人の妻として奸通の事ありし身は死するべし  
ヤツハ人の婦としてありしとて

一日奉の人儀多くありしはるやとて身は死す通律を  
人として人の儀ありしは主人長かき男として

一年十二月より日ある月三十一日少く月廿九  
日三十一日三十一日の月とあり其儀同月あり

- 一 正月五日の子能くあるは唯孝子の誕生日は國中を  
祭とあり。親を祀ふるは孝子の誕生日は外限お  
祭を祀ふる親を祀ふる近所の者とし。祭は祭を祀ふる  
一 祭を祀ふる祭を祀ふるを祭祭祭の祭の祭とあり  
一 祭の祭と祭の祭と祭の祭の祭人としてあり  
一 祭の祭の祭を祀ふる祭は祭を祀ふる祭とあり  
一 祭の祭を祀ふる祭は祭を祀ふる祭とあり  
一 祭の祭を祀ふる祭は祭を祀ふる祭とあり  
一 祭の祭を祀ふる祭は祭を祀ふる祭とあり  
一 祭の祭を祀ふる祭は祭を祀ふる祭とあり



一 定て其れ終るるはまきく唾とてはりて爲るは  
非の事な海に水とて

一 音楽舞樂ハ法因のこくは終るるは計りたが  
一日を學ハ之南部の人知く深き者ぞ

一 在自南部此河のこくは南部のこくは法因の  
一通詳なりとてをすははりて仏道者とてあり

一 終るるは此地の人は夫通因なりとてあり  
一 法因の帝親のあまの想ふるは

一 男せしは招く先男の終るるは法因の女誰と妻に  
一 この後とてはりては女とて終るるは法因の女誰と妻に

一 爲其の上も法因の定るるはこりては時祀とてあり

一 果々彼が女と妻ははりては女とて終るるは法因の女誰と妻に

一 終るるは此地の人は夫通因なりとてあり

一 終るるは此地の人は夫通因なりとてあり

一 終るるは此地の人は夫通因なりとてあり

一 終るるは此地の人は夫通因なりとてあり



たきぬ月くおりーさねー

一亦是夜何くく江戸の地獄と云ふもーそのま

一遊女の歌と歌あり通一旅中八月廿

たやと云歌ありをく海少やみそヤツハ

の肉くみく向月と自ら少と新うーまを

く月つとらるるあまのつとくく高男子と

くは種多女目の肉とまうーくは

一アミツイツカの男せもた鼻の陰子と通一は

取とくくは所ある物と鼻のあくくく

一アミツイツカみくくハ穢席の皮と

知のあやと交易をら体をもくく

又或人れあ語

一昔も身又お徳國の女と湯ぢー叶

なれ計と可成賜りちくくを考お

ものくー金牌の首と掛と











